

# 石庖丁の使用痕分析

永濱 功治

An Analysis on Use-wear and Sickle-gloss of Stone Reaping Knives

Nagahama Koji

## 要旨

鹿児島県内で出土した石庖丁を落射照明付き金属顕微鏡で観察し使用痕分析を行った結果、6点の石庖丁において「コーングロスバッチ」とよばれる特徴的な光沢斑が確認できた。また、光沢斑の大きさや密集度を元に光沢面強度分布図を作成したところ、コーングロスバッチは刃部よりも体部に多く現れるなど、幾つかの特徴的な傾向が認められた。今回の分析はこれまで想定されてきた石庖丁の機能を部分的に裏付ける結果となり、南九州における石器の機能推定や光沢斑形成のメカニズムを探る上での一資料となった。

キーワード：石庖丁、コーングロスバッチ、光沢面強度分布図

## 1 はじめに

1970年代に金属顕微鏡を用いた石器観察がキーリーによって行われ、複製された石器の使用実験結果からポリッシュ（使用痕光沢面）による被加工物の推定や石器の機能推定を行うという技術が確立されてきた。その後、数多くの研究と分析結果の蓄積に伴い使用痕研究は着実に発展してきたといえる。国内においては東北大学使用痕研究チームや御堂島正による実験的な研究がなされ、ポリッシュのタイプ分類と被加工物、操作方法、作業量との関係が示された。この間の研究成果は阿子島香によりまとめられ、詳しく解説されている（阿子島 1989）。

使用痕の研究は東北、中部、近畿地方を中心に研究が進み、収獲具としての機能を解明する上で有効な手段の一つであることが示されてきた。一方、九州地方における分析例は少ないが、福岡県太宰府・佐野地区遺跡群Ⅲ、尾崎遺跡出土の石庖丁で使用痕分析が行われた例があり、基本的にはこれまで分析されてきた石庖丁の使用痕と同じパターンを示す結果が出ている（山村 1993）。また、鹿児島県千道遺跡では縄文時代後期の石器9点のうち4点に使用痕が確認されており、いずれも草本植物を切るという作業に用いられたと推定された（御堂島 1996）。

本稿ではこれまで行われてきた実験使用痕分析の結果をふまえ、鹿児島県内出土の石庖丁を例に使用痕分析を行い、光沢分布図から被加工物との接触面や握り方、操作法などの機能推定を行った。

## 2 県内出土の石庖丁と分析資料

鹿児島県内で石庖丁が出土した遺跡は高橋貝塚、外川江遺跡、高付遺跡など川内、知覧、金峰、指宿、高山、鹿屋方面などに広がりを見せ、80遺跡、計120点にもおよんでい

る（第1図、第1表、本田 1992に加筆）。その分布を見ると主に川内川、万ノ瀬川、甲突川、肝属川という主要河川流域及び平野部、海岸線、盆地に広がりを見せていることが分かる。南九州における農耕文化はシラス台地を利用した畑作を主な生業とする集団と薩摩半島や肝属平野を中心に水田稲作を主な生業とした集団があり、弥生時代中期を境に発展していったことが示されている（堂込 2000）。また、弥生時代後期以降は、石庖丁の増加に伴い（本田 1992）、従来から行われていた畑作、狩猟、採集などに水田稲作を組み入れ、安定した生業活動を始めた時期と考えられている（川口 2002）。

今回分析資料として用いた石庖丁は県立埋蔵文化財センター所蔵の石庖丁8点で、完形のものが3点、破損しているものが4点、未完成品が1点である（第2表、第2図）。

資料No1は鎮守ヶ追遺跡から出土した石庖丁である。鎮守ヶ追遺跡は鹿屋市南町に所在し、標高約70mの台地縁部の畑地に位置する。台地の東西両側には浸食谷が発達し、共に大始良川周辺水田地帯より続く水田が台地を取り巻くように存在し、清水川及び獅子目川支流が流れている。石庖丁は第Ⅲa層紫色コラから出土しており、第Ⅳa層茶褐色軽石混入火山灰層上部からは成川式土器や弥生土器（後期該当）が出土している。

資料No2～4が出土した外川江遺跡は川内市五代町西外川江に所在し、高城川と川内川の合流地点から北へ約1.5km離れた平地にある。標高は約4mで田圃に囲まれており、満潮時には遺跡の大半が水面下に没する低地である。石庖丁は第Ⅳ層粘質黄褐色土から出土しており、他の遺物についても弥生時代後期末～古墳時代初頭が主体である。

資料No5は上加世田2遺跡から出土した石庖丁である。上加世田遺跡は加世田市川畑に所在し、万之瀬川の上流、